

退任のご挨拶

前会長 大滝潤二

この度の総会で退任させていただくことになりました。会長としては令和2年から5年までの2期4年の任務でしたが、その間を振り返ってみます。

会長になるきっかけは、伊藤吉樹前会長から電話等で懇願されたことです。それまでは、以前に会長を務めたことから顧問として発言させていただくことはありましたが、直接的には県岳連の運営にはタッチしないでおりました。

前会長からの依頼は長時間にわたり結局のところ自分は根負けして引き受けたのが実情です。

それで、令和2年（2021）3月の総会で会長に選任されたのですが、令和2年度の東北大会が山形県担当であり、旧執行部から伊藤前会長が副会長に入るなど、全面的な援助を得て、何とかやり遂げることができました。

ところが、それまでスポーツクライミング（SC）競技運営に携わってきた役員の多くが、東北大会を機に退任することになり、次年度以降の競技運営が危ぶまれました。さらに、加盟する単位山岳会の中で唯一SCを主に活動してきた「アクションパーク米沢」が退会しました。

これにより、県岳連が競技運営から手を引くことを決議し、県スポーツ協会などとの交渉に当たりました。もとより県山岳連盟は、目的が8項目ありますが、その中のSC競技に関することに偏った運営がなされているのではないかという、就任前からの自分の思いがありました。

その思いを県スポーツ協会等に話したのですが、その結論は、オリンピックや国体等の種目であるSCの競技団体としての県岳連の存在意義を再確認するものになりました。幸いに「山形SC連絡会」が県岳連に加盟し、競技に関する事務を担当することで現在に至っています。

また、一連の経過は上部団体である日本山岳・スポーツクライミング協会（JMSCA）でも「山形問題」として取り上げられました。全県調査の結果、地方の疲弊は全国的なものだとして、プロジェクトチームを作り対策を考えることになりました。

その矢先、JMSCAでは赤字問題が噴出し、その対応に迫われ、「山形問題」どころではないというような考えもあるようですが、我々としては何らかの対応をしてもらいたいものです。

この期間、自分にも大きな変化がありました。退職後70歳台の前半は年間60日以上、の山行日数を数えていたのが、年齢のせいかバランスが悪くなり、救助を求めるほどではなかったものの、何度もの滑落事故を起こしました。

そのため、自分なりに困難な登山は自粛し、前年度は低山に年20日程度の山行に留まりました。目と耳の老化も進み、県岳連の通常の会議の主宰も危ぶまれる次第でした。

そこで退任の事を執行部にお願いしたところ今回の改選に至った次第です。

新執行部の皆様の益々のご活躍を期待し、退任のご挨拶といたします。